

平成二十九年年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題用紙（1～14ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしたちの社会は長らく、^①ひとを選ぶ社会として形成されてきた。履歴書というものを一覽すればすぐにわかるように、そこに記載を求められているのは、当人に「何ができるか」と当人がこれまで ^②ギョウセキとして「何をしてきたか」の一覽である。学歴・職歴・資格・免許、特技・賞罰などである。そしてそれが選抜時の ^③サンショウデータとなる。この試験という仕組みに、現代の若い世代はいよいよ幼いときから組み込まれるようになっていく。かつて人生を決める査定といえば高校・大学の入試と入社試験くらいのもだったが、いまはその入試が小学校、さらには幼稚園の時点にまで繰り上がり、他方、昇進や再就職のための査定は定年の後まで続く。選考や査定、評価といった仕組みが社会の隅々^④にまで ^⑤シントウしてきて、いまやそのことじたいを ^⑥フシンにおもうひとは少ない。

ひとを選別するという作業は試験というかたちでなされる。入学試験、入社試験、資格・検定試験、昇進試験などである。そして、ひとを選別するというのは、いうまでもなくだれかを選び、だれかを選ばないこと、^⑦A だれかを外すということである。そして、「不合格」との判定とは、「あなたはわたしたちの組織に相応^⑧しいものではない」「あなたの存在はわたしたちには不要である」というメッセージを伝達することである。もっと身も蓋もない言い方をすれば、だれかに向かって「あなたは必要」「あなたは不要」と言い切ってしまうことである。さらにはあからさまにいえば、だれかの存在を値踏み^⑨することである。そのことがひとにどれほどのダメージを、それと知られることなく与え続けてきたか。このことをいちど立ち止まって考える必要がある。

^⑩B、競争を^⑪ベースとする社会次元では、選別・選抜はあたりまえのことだ。「選良」(エリート)、「選手」は、組織によって選ばれる。ある領域での際立った能力や属性をもつものとして。それは、そういう属性をもつものならだれでもよいし、またいつでも別のひとと取り替え可能である。これは、競争社会の、^⑫C 競技の掟^⑬である。競うこと、つまり勝ち負けがかかっていくような場面では、有能な者を選抜するというのは、差別でもなんでもない。「X」「Y」、この考え方で競争社会は運営される。そして入試もまた、そういう社会の選抜制度の一つである。とみなすことで、あたりまえの行事のように毎年なされてきた。そんななか、いちどかぎりあるとみなすこと、あたりの生活の大筋が決まるといふ、ひとをばかにした^⑭サイバル・ゲームのような制度のなかで、ひとはふつう、それをゲームとして割り切ること、ぜったいに本気にならず最短時間で要領よく切り抜けること、つまりはこんなところに人生の本舞台はないとじぶんに言い聞かせることで、なんとか切り抜けようとする。選ばれなくてもことん落ち込まなくてもすむように。ひとを育てるといふ、ほんらい競争原理でいとなまれるべき

ものではない場面で、学びもまたこのような「戦略」のなかでしかおこなえないというのは不幸なことである。

③ 社会全体がこのように「学校化」してくるとするのは、わたしたちの存在がいつも「もしくできれば」という条件つきでしか肯定されないということだ。だからひとはいつも、じぶんにできること、じぶんにしかできないことを必死で問う。こうした問いに、^④セめさいなまれても、^⑤答えはめったなことでは出ない。そのうちこうした問いは、じぶんはまだここにいていいのか、ここにいるに値するものかという問いへと尖ってくる。が、そこにも確かな答えがあらうはずはない。だからひとは、「もしくできれば」などという条件をつけないでたがいそのまま認めあえる関係、そう、「わたし」のこの存在を無条件に肯定してくれるような他者との関係に渴くことになる。「わたし」のこの存在は他者からの承認に懸かっているからだ。だから、いまどきの子どもは教師よりも親よりも友だちを大切にする。

D

それはけっして安住の場所ではない。友だちに疎まれないよう、友だちの環から外されないよう、それに相應しいじぶんを必死で演じ続けなければならぬからだ。それほどまでに社会の「学校化」はひとびとの〈個〉としての存在の [※]コアを蝕みつつある。

インターネット、[※]ブログ、2ちゃんねる、ツイッター……と、顔をじかにつきあわせることのない匿名のコミュニケーションに、いまひとびとははまっている。けれども、^⑤これにきたま慰められることはあっても、身を支えられるということはない。ひとがじぶんがここにいていい理由をみずからに納得させることができるのは、じぶんがここにいることが別のだれかにとって（どんなに小さくても）意味があると確認できるときである。だれかに、あなたがそこにいないと困ると言われるときである。「居場所がない」というのは、わたしがここにいることがだれからも求められていないということである。特定のだれかにとってじぶんの存在がどのような意味をもっているか、その確認がひとの存在を支える。だからこそ、きちんとした（ Y ）をもつメッセージが切実な意味をもつのである。自己とはまさしく「他者の他者」——じぶんがじぶん以外のだれかにとって意味ある他者であるということ——なのであるから。

（鷺田 清一『しんがりの思想―反リーダーシップ論―』から）

※ ベース ————— 基盤。

※ サバイバル・ゲーム ————— 遊びとして生き残りをかけた競争。

※ コア ————— ものの中心。

※ ブログ、2ちゃんねる、ツイッター

————— インターネット上で他者と交流を持つことが出来る場。

問一 二重傍線部①～⑥のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 空欄

A

 ～

D

 に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア けれども イ つまり ウ なぜなら エ たしかに オ あるいは

問三 本文には次の一文が抜けています。どの文の後に入りますか。直前の文の最初の五字を抜き出して答えなさい。

そしてこの「存在の不要」という烙印を、わたしたちは物心つかないうちから押され続ける。

問四 傍線部①「ひとを選ぶ社会」とありますが、筆者は結局それをどういう社会だと考えていますか。解答欄に合うように本文から十二字で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部②「学歴・職歴、資格・免許、特技・賞罰」とありますが、同じ内容のことを述べている部分を本文から十五字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問六 空欄（ X ）にあてはまる四字熟語として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 付和雷同 イ 我田引水 ウ 適材適所 エ 一期一会

問七 傍線部③「社会全体がこのように『学校化』してくる」とありますが、社会全体が「学校化」するなかで、どのような事態が生じていると筆者は考えていますか。正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者との優劣を比べなくてもよい学問の場において、個人が他者との相対的關係で評価される。

イ 他者からの評価を受ける状況のなかで、他者から決して侵されない強い自己を維持しようとする。

ウ 他者との違いを見つけ出そうとしたり、ありのままの自分を受け入れてくれる他者を望んだりする。

エ 選考において、他者から評価を得られなくても、自分を守るために都合の良い考え方をしようとする。

問八 傍線部④「そのうちこうした問いは、じぶんはまだここにいいのか、ここにいるに値するものかという問いへと尖^{とが}ってくる」とありますが、筆者はどのようなことを表現しようとしたのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何かが出来ることで、自分への承認を得るといふ社会で生活しているため、他者とは違う自己の能力や存在のあり方を考えるが、容易にわかることではないので、自問自答をし続け、次第に自己に問いかける内容が厳格になっていくこと。

イ 成果しか認めてもらえず、それ以外は評価されない社会の中で、どれだけ自分が頑張っても満足してくれない親や先生に不満を募^つらせ、認められることはないと自暴自棄になり、周囲に対して荒^すんだ態度で接するようになっていくこと。

ウ 全く変化のない日常の中で、同じような毎日をただ漫然^{まんぜん}と生きていくのは良くないと考え、自分らしい生き方を見つけようとして、自分を変えていくための方法を模索^{もさく}し、苦しみながらも一つの結論へとたどりつくようになること。

エ 社会生活にうまく適応しようとして、他人の要求に合わせるといふことを重視した結果、自分らしい生き方を見失ってしまいがちになるが、他人に合わせることを考える中で、他人の些細^{さいさい}な心の動きも敏感^{びんかん}に察知^{さつち}できるようになること。

問九 傍線部⑤「これにときたま慰められることはあっても、身を支えられるということはない」とありますが、筆者がこのように考えたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他者にとって望ましい姿から脱却した新しい自分を創^{つく}り出そうと試^{こころ}みても、すでに構築された人間関係の中で理解されている自己の個性を改めることはできず、他人に認められることはないから。

イ 学校化した社会でも、個人が他者との関係に安心していられる場所はあるが、その居心地^{いごち}のよい場所に居続^いけるためには、周囲の仲間との間に築かれていた良好な関係を断ち切る必要があるから。

ウ 仮想的な世界において、個人の長所を他者に見せなくても、自分の存在は相手から受け入れられるが、包み隠さずありのままの自分をさらけ出さなければ信頼はされず、手助けも得ることができないから。

エ 不特定多数の相手に対して、一定の意思の伝達や理解を図ることはできるが、強い絆^{きずな}や信頼で結びついているわけではないので人間相互の関係性が薄く、自己を明確に定めることが困難であるから。

問十 空欄（ Y ）にあてはまる語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 回線 イ 履歴 ウ 宛名 エ 座標

問十一 本文の論の構成や文章の展開に関する説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現在の社会を形成している「ひとを選ぶ」仕組みを分かりやすく説明し、社会で生じている弊害（へいがい）について問題提起をしたうえで、他者と自己との関係に対して深い洞察のもと考えを示している。

イ 誰もが経験する人生での出来事を通して、「ひとを選ぶ」社会が形成されたことの妥当性を論じつつも、文明が発達した現代社会において、人間が孤独な存在になっていることを指摘している。

ウ 身近な事例や専門家の見解を数多く示して、「ひとを選ぶ」社会の現状を分析し、社会が抱える問題を明らかにしたうえで、今後の社会の望ましいあり方について具体的な意見を提示している。

エ 現代社会に見られる「ひとを選ぶ」発想を批判し、筆者と異なる立場の意見を個別に検証した後、他者との関係性を保ちつつ、自分らしさを見失わない生き方について明確な意見を述べている。

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

明治十一（一八七八）年五月、日本へやってきたイギリス人女性旅行家イザベラ・バードは東京から陸路で栃木、福島を経由して新潟まで行き、そこから北海道へ船で行く旅を計画する。伊藤鶴吉は通訳兼案内人として彼女に同行することになった。

きついが美しい景色が続く。

ようやく峠の頂上に達するとバードは歓声を発した。緑の大俯瞰である。山々がどこまでも連なっている。

「神になった気分がしない？」

岩に腰掛けてバードは心地好い風を浴びた。

「この辺りは私の持っている地図では空白となっている。つまり私がこの峠の頂上に立った最初の外国人ということになる」

「本当によく頑張りました」

① 伊藤は本心から口にした。

「ここから先は下り道ばかりです。田島はまだ遠いですが、そこにさえ着ければ後は普通の街道となる。私もほっとしました」

「不思議なのはどんな山奥にも人の暮らす集落があること。なぜわざわざそんな場所に住んでいなければならないのかしら。確かに日本は小さな国かも知れないけれど」

「国の狭さより独立した藩の在り方が原因しているんでしょう。今は違いますが、つい近年まで人々は藩からの転出を許されていませんでした。それを許せば藩の経済が成り立たなくなる。そういう体制が二百五十年も続いていたんです」

「そのお陰でこんな山奥にも道が通じているということね」

「道と自慢できるものではないですがね」

「立派な道よ。馬に乗ったままで来られた」

「お訊きしていいですか？」

伊藤は嬉しそうにしているバードに、

「ろくな食べ物もない。宿は蚤だらけ。見るべき史跡もない。きつい道で尻が痛くなる。こういう旅を本当に楽しいと？」

「楽しいわよ。だれも見なかったことのない景色を私が一番最初に眺めるんですもの」

「土地の者たちはいつも見えています。外国人が、という意味に過ぎない」

「あなたは日本人で初めてキリマンジャロの山を眺めた人間になってみたいと考えたことはないの？」

「どうですかね。見たいと思う国や町はいくらでもあります。自分が一番最初にと考えたことは……それに、あなたには申し訳ありませんが、こういう山奥を歩く気にはなれません。いくらでも日本で見られます。せっかくアメリカやイギリスに渡った意味がない。なんの役にも立たないでしょう」

「それを言うなら、^③ 横浜や東京は私にとってなんの意味もない町。目新しいものはなにもない」

「しかし古い史跡は無数にあります」

「日本の歴史に興味があれば、の話ね」

「バードさんはなんの興味も？」

「私は少しはあるわよ。^④ 私の本を読んでもくれる人たちのことを言っているの。その人たちはたぶん日本への旅に冒険を求める。過ぎ去った時代ではなく今の日本で冒険を楽しみたいの。私もそう」

「本のためだけにこういう旅を？」

「面白いから本に書きたくなる。確かに本にしたいと思って来たけれど、詰まらなければ本にしない。そんな本は書いても売れないし、こちらでも書くだけ無駄」

「必ず本にすると決まっているわけではないんですね」

「書く決めてるわよ。^⑤ あなたのような変人とも出会った。私が想像していたより日本は興味深い。ことに日本人という国民がね」

「私のどこが変人なんです？」

「日本を深く愛していながら、日本を嫌悪^{けんお}している。外国に憧^{あこが}れて必死に言葉を習得するのに、外国を軽蔑^{けいべつ}している」

「様々な面があります。公平なだけですよ」

「公平な人はなにかを深くは愛さない。あなたは分析のし甲斐^{がい}がある。あなたの言動を書くだけで日本人が浮かび上がる」

「私はごく当たり前の人間です」

「だから日本の国民性が面白いと言ったの。さっきの集落でも感じなかった？」

「なにをです？」

「食事している私を取り巻いていた人々の目。^A の奥に怯^{おそ}えがある。二時間も眺めて飽きない ^B を持っているのに、私が立ち去ると知ったらあっさりと散った。両極端なものが心の中に同居している。私にはそれが不思議でならないの。そういう人間を育てた日本にどんな魅^ひかれていく」

「分^{ぶん}をわきまえているだけです」

「それはどういふこと？」

Ⅲ

「欲や 心を露にするのは恥ずかしいことです。自分はそれほどの存在ではない」

「詰まらない無価値な人間だと?」

「価値があるかないかは周りが決めることで、自分ではない」

「皆がそうなら、なにもはじまらない」

「それ以上のことは私にも上手く説明できませんが・・・」

「口にしないで一人で考えているから自分の本当の心も見えなくなるのよ」

「そういうことを書いて本が売れますか?」

「私の書く本は旅行案内じゃない。いつでも私が見ているのはその国の人間たち」

「そうとは知りませんでした」

「だから奥地を訪ね歩く。都会では人間の心が見えにくくなっている」

なるほど、と伊藤にも得心できるものがあつた。

(高橋 克彦『ジャーニー・ボーイ』から)

(注)※ 田島——福島県南会津郡田島町。現在の南会津町。栃木県との県境に

あたる。

※ 藩——江戸時代の大名が治めた領地。

※ キリマンジャロの山——タンザニア北東部にある山で、アフリカ大陸の最高峰。

問一 波線部Ⅰ～Ⅲの本文中における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 大俯瞰

- ア 望遠鏡や双眼鏡で拡大して見る遠くの風景。
- イ 高い所から全体を見下ろした壮大な風景。
- ウ 海岸線までを一望のもとに収めた広大な風景。
- エ 青々とした大草原が広がっている風景。

Ⅱ 分をわきまえている

- ア 先入観をもっていること。
- イ 情勢を見守っていること。
- ウ 身の程を知っていること。
- エ 自己主張をしていること。

Ⅲ 心を露にする

- ア 気持ちを正直に知らせること。
イ 気持ちをはっきりと知覚すること。
ウ 気持ちをわずかに見せること。
エ 気持ちを無遠慮に示すこと。

問二 傍線部①「伊藤は本心から口にした」について、この時の「伊藤」の心情を説明したものと
して最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア バードが険しい峠の頂上まで無事にたどりついたことを称賛している。
イ バードが外国人で初めての女性の登頂者となったことに驚嘆している。
ウ バードが地図上には書かれていない峠を発見したことを賛美している。
エ バードが観光地でもない退屈な道のりを克服したことに満足している。

問三 傍線部②「嬉しそうにしているバード」とありますが、バードがこのような気持ちになった
のはなぜですか。その理由として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 旅を続けてきたおかげですばらしい景色を見ることができたから。
イ 次々に起こる他人の困難が自分にとっては面白いと感じたから。
ウ この旅のなかで日本人と交流をしているいろいろな発見をしたから。
エ イギリス人の自分がここに来た最初の外国人だと知ったから。

問四 傍線部③「横浜や東京は私にとってなんの意味もない町」とありますが、バードにはどのよ
うな考えがあつてこのような発言をしたのですか。その考えがよくわかる部分を本文から二十
字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 傍線部④「私の本を読んでくれる人たち」とはどういう人たちのことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア バードの本で西洋と東洋の違いを知り、東洋への旅に憧れを抱いている人たち。
- イ 未知の歴史について興味を持ち、その国の知識を得たいと考えている人たち。
- ウ 過ぎ去った時代を懐かしむとともに、現在の生活様式に強い関心がある人たち。
- エ バードの旅に刺激を求め、本に書かれている人々に興味を示すような人たち。

問六 傍線部⑤「あなたのような変人とも出会った」とありますが、バードは伊藤にどのような点があるから「変人」と言っているのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本を誇りに思っていると知っているのに、内心では日本人を侮蔑し、外国人と親しくなることに一生懸命で、自国への愛着を感じていない点。
- イ 日本のことを気に入らないと思っっているのに、一方では日本に対する深い愛情も抱いているというように、相反する感情を持ち合わせている点。
- ウ 外国人でしかも女性であるバードのことなど本当は好きではないのに、通訳兼案内人としての仕事を真面目に務め、バードの信頼を得ている点。
- エ 出世のためにバードの旅に同行しているのに、バードや他の外国人が日本に対して持っている偏見を英語を駆使してなくそうと努力している点。

問七 空欄 A・B にそれぞれ入るものの組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-------|---|-----|
| ア | A | 冷静さ | B | 忍耐力 |
| イ | A | 冷静さ | B | 功名心 |
| ウ | A | 大胆さ | B | 功名心 |
| エ | A | 大胆さ | B | 好奇心 |
| オ | A | 人懐っこさ | B | 忍耐力 |
| カ | A | 人懐っこさ | B | 好奇心 |

問八 本文の内容についての説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本が西洋に比べて遅れていることを恥ずかしく思っている伊藤に、バードは日本人が勤勉で好奇心にあふれたすばらしい民族であるという自分の発見を教えることで、自信を持たせようとしている。

イ 近代化の遅れた日本や日本人に対してあまりいい感情を持っていなかったバードの考えを変えようとして、伊藤は日本人の持つ謙虚さを説明したけれども、分かってもらえず残念に思っている。

ウ 日本の奥地を旅しようとするバードが、単に名所や史跡ではなく日本人そのものに興味を持っていくことを知り、伊藤は改めて日本人について考えとともに、バードのものの見方に感心している。

エ 自分を無価値なものだと考えることが日本人らしさなのだと考えている伊藤に、自分の価値を主張しないのは一部の日本人だけなので、伊藤の考える日本人像は正しくないとバードは指摘している。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(漢字の読みは現代仮名づかいに直しています。)

これも今は昔、[※]伴大納言善男[※]は[※]佐渡国[※]郡司[※]が従者なり。

かの国にて善男、夢に見るやう、[※]西大寺と東大寺とをまたげて立ちたりと見て、妻の女にこ

のよしを語る。妻のいはく、^aそこのまたこそ、裂かれんずらめと合はするに、善男、おどろき

て、よしなき事を語りてけるかなと^①恐れ思ひて、主の郡司が家へ行き向ふ所に、郡司、きはめ

たる相人なりけるが、^②日來はさもせぬに、ことの外に[※]饗応して、[※]円座とりいで、むかひて、

I 召しのぼせければ、善男、あやしみをなして、我をすかしのぼせて、妻の^Aいひつるやうに、ま

たなど裂かんずるやらんと恐れ思ふ程に、郡司がいはく、^{II}汝、^③やむことなき^③高相の夢見てけり。

III それに、^bよしなき人に語りてけり。かならず、大位にはいたるとも、事いで来て、罪をかぶら

んぞといふ。

然るあひだ、善男、縁につきて、^{きょうのぼ}京上りして、大納言にいたる。されども、^{なほ}猶、罪を^Bかうぶ

る。^④郡司がことばにたがはず。

(『宇治拾遺物語』から)

(注) ※ 伴大納言善男——^{ばんのよしお}伴善男。大納言は役職名。

※ 佐渡国——現在の新潟県の一部。

※ 郡司——国司のもとで、郡内の政務をつかさどった役人。

※ 西大寺・東大寺——現在の奈良市にある、当時大きな勢力を誇った寺。二つの寺は、約五キロメートル離れている。

※ 饗応——ごちそうすること。

※ 円座——植物の茎や葉などで、うず巻き状に円く平たく編んだ敷物。

問一 二重傍線部 A・B を現代仮名づかいに直しなさい。

問二 傍線部 I～III の口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 召^めしのぼせければ

- ア 食事を召し上がりながら話したので
- イ お取り寄せになってもてなしたので
- ウ お呼びになって上座^{かみざ}に招いたので
- エ おそばに寄り聞こうとしたので

II やむことなき

- ア すぐれた
- イ 終わりのない
- ウ 風情^{ふせい}のある
- エ 人に話せない

III それに

- ア その上に
- イ それだから
- ウ その結果
- エ それなのに

問三 波線部 a「そこ」、b「よしなき人」が指し示す人物として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 善男 イ 郡司 ウ 善男の妻 エ 郡司の妻

問四 傍線部①「恐れ思ひて」について、善男は何を恐れたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 妻が予想に反して冷たい態度を取ったこと。
- イ 妻の不吉な夢判断が現実のものとなること。
- ウ 妻に相談してしまったため祟^{たた}りを受けること。
- エ 妻に夢の内容をからかわれて笑われたこと。

問五 傍線部②「日來はさもせぬに、ことの外に饗応して」について、郡司はどうしてこのようにしたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 善男をだまして安心させた後、その夢のご利益を奪おうとしたから。

イ 善男の不安感をやわらげたくて、彼の相談に乗ろうと考えたから。

ウ 善男のことを、高い位に上がるべき特別な人物であると考えたから。

エ 善男の話を聞いてその立場に同情し、夫婦仲を修復しようとしたから。

問六 傍線部③「高相の夢」について、夢の内容が書かれている部分を本文から二十字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七 傍線部④「郡司がことばにたがはず」とありますが、郡司はどのようなことを言い当てたのですか。具体的な内容が書かれている部分を、本文から三十字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問八 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 郡司は、善男の夢が出世を意味すると分かっていたけれども、自分より先に出世させたくないのので、嘘の夢判断をした。

イ 郡司は、このままでは善男が不幸になると考え、善男があまりにもかわいそうに思われたので、仕方なく事実を話した。

ウ 善男は、自分が見た夢を妻に自慢したが、妻は夫の態度が気に入らなかったのので、善男を不快にするような夢判断をした。

エ 善男は、もともと佐渡国に住んでいたのだが、郡司の家を訪れて相談した後に、遠く離れた都へと移り住むことになった。